

女子大学生のデートDVに対する態度

教育経験の観点から

Female University Students' Attitudes toward Dating Violence
From the perspective of educational experience

今村 友木子¹⁾

Yukiko IMAMURA

松尾 有紗²⁾

Arisa MATSUO

【問題および目的】

デートDVとは、交際相手など親密な関係にある者から受ける暴力のことであり、DVとの違いは婚姻関係にあるかないかである。デートDVの主な暴力の内容としては、身体に直接暴力を振るう身体的暴力が目立つ。近年はモラルハラスメント（モラハラ）などの言語的な暴力、相手を精神的に追い詰める行動や束縛するといった精神的暴力が問題視されている。他にもデートDVの暴力には、相手に金銭を強要する経済的暴力や、無理やり相手の体に触れる、相手の意思を無視し避妊をしないといった性的暴力なども含まれている。

しかし、交際相手という親密な関係にある当事者間では、たとえ暴力を受けていたとしても「これは暴力ではない」という認識を持っている場合や、暴力だとわかっても愛情表現として許容している場合がある。例えば、愛しているから束縛してもよいなどといった考えを持つ人も少なくない。このように、デートDVであっても愛情表現として受け入れてしまうことで加害・被害の認識がしにくくなる。だからこそ、デートDVの実態

は捉えにくく、加害・被害の判断も難しくなっていることが問題とされている。越智ら(2014)らは、近年、直接的な身体的暴力を伴っていないが、言葉や態度で相手を傷つける行為が問題となっているとし、「デートハラスメント」という語を用いている。デートハラスメントとは、冗談混じりにたたく、相手の容姿に過度な指摘をすといった身の回りに起こりやすいハラスメント行為であり、デートDVに含まれる暴力の一つといえる。なぜこれが問題となっているかという点、加害者・被害者共に暴力だと認識しにくい点、直接的な暴力よりも普遍的に蔓延している可能性が非常に高いからである。日常的に親密な相手から言語的暴力や束縛などの精神的なダメージを負い続けていると、自信を失い、自己肯定感が低下してしまう。更に、ひどい言葉をかけられた時に「自分が悪いのだ」、「相手の言うとおりに」と受け入れてしまうことで、暴力を受け入れ、そこから抜け出す気力をなくしてしまう。たとえ暴力から抜け出せたとしても心の傷が残り続けるなど、その後の人生に深刻な影響を与える。

これらの被害を防ぐために、教育を通して自分の身を守る方法やデートDVについて学び、一次予防をすることが求められている。

1) 金城学院大学人間科学部

2) 岐阜県中央子ども相談センター

藤原・吉岡(2014)は自らの研究においてデートDVについて知識を有する者が多かったことについて、看護学専攻及び看護専門学校の学生を対象としており、講義でデートDVについて学ぶ機会が多いことが調査結果に影響したのではないかと考察している。また、デートDVに関する知識は、暴力認識度との間に正の相関が見られ、暴力許容度及びジェンダー意識度との間には弱い負の相関しか認められなかったと述べられている。近年の性犯罪や性暴力の増加傾向、より複雑さを増す性的問題に対応するために、文部科学省(2021)は「性犯罪・性暴力対策の強化の方針」を踏まえ、2021年から「生命(いのち)の安全教育」を推進している。この「生命(いのち)の安全教育」は、発達段階や学校の状況を踏まえ実施されることとなっており、文部科学省がホームページで配布している教材の内容としては、プライベートゾーンに関する説明や、SNSの使い方、性暴力(デートDVやDV)などが取り挙げられている。年齢に合わせて内容の表現を変えており、高校卒向けの教材では性暴力という単語を使い、SNSの使い方、恋人や異性との距離感、関わり方などについて考える内容となっている。このような教育は、子ども達が性犯罪や性暴力の加害者・被害者にならないことを狙いとして行われている。

さらに近年では、LGBTや男女平等といったジェンダー意識に関する話題が大きく取り上げられることが多く、女性、男性の役割についても注目されている。SNSや動画投稿サイトでは、ジェンダーに関する活動や性教育に関して若者をターゲットに活動している人々が積極的に取り上げられるようになった。「ワンオペ育児」はインターネットで広まった言葉であり(藤田, 2017, 2018), 2017年にはユーキャン新語・流行語大賞(「現代用

語の基礎知識」選, 2017)にノミネートされた。他にも、社会の変化に伴って女性のライフスタイルの多様化や共働き家庭が増加したことを受け、厚生労働省(2021)は「イクメンプロジェクト」という活動を行い、男女の「仕事と育児の両立」を支援するために、女性に負担が偏りやすい育児や家事を夫婦で協力して行えるような社会づくりを推進している。このような活動からも男女の役割観の変化が見られる。しかし、男女の性役割観に対する考え方が変化していく中でも伝統的な男女の性役割観はまだ根強く残っている。そこには、社会的な影響による無意識の性役割観が関係していると考えられる。内閣府(2021)が行った性別による無意識の思い込み(アンコンシャス・バイアス)に関する調査では、男性50-60代で特に性別役割意識(「そう思う」傾向)が強いという結果が見られた。今回の研究対象の父親世代でもあり、この世代の価値観が調査対象に影響を及ぼしている可能性があると考えられる。また、職場の役割分担に関する性別役割意識は、全ての年代において、女性よりも男性の方が強いことが明らかとなった。さらに、夫婦の役割分担は、女性でも年代が高くなるにつれて性別役割意識(「そう思う」傾向)が強くなる傾向が見られた。若い世代ほど性別役割意識は男女平等の傾向が見られるが、どの年代でも男性は女性よりも性別役割意識は強かったということが明らかとなった。デートDVは、男性らしさ・女性らしさに強く囚われているために加害者・被害者となることがある。このことから、性役割観はデートDVに抵抗するかどうかの要因の一つとなるのではないかと考えられる。

以上のことから、デートDVの暴力を受けたときにどのように認識するのか、また実際に行動をする際に今まで経験した教育が行動

に影響しているのかという疑問が生じる。そこで本研究では、教育経験によるデートDVの暴力の認識や、デートDVに対する態度の違い、性役割観と教育経験、デートDVの関連性について検討することを目的とする。

仮説①：自分の身を守る教育や性に関する教育を多く受けた人は男女の伝統的な性役割観が弱い傾向が見られ、デートDVの暴力に対して抵抗する程度が高い。

仮説②：架空の人物を想像した場合と比べ、現実の人物を想像した場合は教育経験に関わらず男女の性役割観が強く、デートDVの暴力に対して抵抗する程度が低い。

【方法】

1. **調査対象** 私立女子大学の3年生、4年生の106名を調査対象とした。

2. **調査時期** 2021年6月下旬から2021年7月下旬

3. **調査方法** 対面授業内で質問紙調査を実施し回答を求めた。遠隔授業においてgoogleフォームによる調査を実施し回答を求めた。

4. **調査内容** 調査内容は以下の通りであった。

1) フェイスシート

①デートDVに関連すると思われる教育を受けた経験を尋ねた。あてはまるものすべてを選択し、回答するよう求めた。

教育内容：「防犯」、「ネットリテラシー」、「異性との関わり方」、「LGBTQ」、「ジェンダー」、「性行為（避妊具や避妊薬など）」、「性病（梅毒など）」、「生命の誕生」、「その他」

教育の場：「小学校から高校」、「大学」、「学外」

方法：「保健体育」、「家庭科」、「社会」、

「共通教育」、「専門科目」、「講演会」、「研修」、「本」、「その他」

満足度：「①役に立った」、「②大体役に立った」、「③どちらともいえない」、「④あまり役に立たなかった」、「⑤役に立たなかった」の5段階評価で回答を求めた。

②デートバイオレンス・ハラスメント尺度に関して誰を思い浮かべて回答したのかを尋ねた。「現在の交際相手」、「過去の交際相手」、「架空の交際相手」のうち一つを選択するよう求めた。

③学科、学年、年齢の回答を求めた。

④悩んだ際に援助を求める対象の回答を求めた。

2) 質問紙

①デートDVに対する抵抗：デートバイオレンス・ハラスメント尺度（越智ら、2014）42項目を使用した。この尺度は、直接的暴力（項目例：相手に顔面を拳でなぐられる）6項目、間接的暴力（項目例：殴るそぶりや、ものを投げつけるふりをしておどかさされる）6項目、支配・監視（項目例：交友関係や行動をチェックされる）14項目、言語的暴力（項目例：相手に馬鹿にされたり、見下されるような言い方をされる）6項目、経済的暴力（項目例：貸したお金やものを返されない）3項目、つきまとい・ストーキング（項目例：生活上困るような時間（深夜や授業中など）にたいした用事もないのに電話をかけてこられたことがある）7項目の6因子から構成され、デートDVについての行為を受けた経験を回答する尺度であるが、本研究ではそのよう行為に対する抵抗について尋ねるため、これらの項目について、「絶対に抗議しない（1点）」、「どちらかという抗議しない（2点）」、「どちらかという抗議する（4点）」、「絶対に抗議する（5

点)」の5件法で回答を求めた。また、回答に先立って、現在、過去、架空いずれかの交際相手を思い浮かべることができることを求めた。

② 性役割性志向尺度 ISRO (Inventory of Sex-Role Orientation) 日本語版 (東, 1990) 16項目を使用した。これらの項目について「非常に反対 (1点)」、「やや反対 (2点)」、「どちらでもない (3点)」、「やや賛成 (4点)」、「非常に賛成 (5点)」の5件法で回答を求めた。

3) デブリーフィング

再調査した内容は、回答者に心理的負担が大きいことを考慮し、調査後に調査の本来の目的を口頭、又は書類で説明した。また、デートDVに巻き込まれないためにどのような行動がデートDVにあたるのかを合わせて説明した。

【結果】

質問紙は、106名から回収し、有効回答数は103名であった。デートDVに関する回答の際に、現在の交際相手を想定した人は26名、過去の交際相手を想定した人は28名、架空の交際相手を想定した人は49名であった。

1. 尺度の検討

1) デートバイオレンス・ハラスメント尺度の信頼性

各因子の α 係数は、第1因子「直接的暴力」 $\alpha = .96$ 、第2因子「間接的暴力」 $\alpha = .93$ 、第3因子「支配・監視」 $\alpha = .94$ 、第4因子「言語的暴力」 $\alpha = .88$ 、第5因子「経済的暴力」 $\alpha = .80$ 、第6因子「つきまとい・ストーキング」 $\alpha = .87$ であった。以上の結果から、全ての因子において十分な信頼性があると結論した。信頼性分析の結果をTable 1に示した。

2) ISRO尺度の因子分析結果

ISRO尺度については日本語版の作成から20年以上が経過し、性役割志向についての考

え方が大きく変化していることが考えられたため、因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行った。その結果(Table 2)、元の尺度は3因子であったが、固有値の減衰傾向(4.57→1.66→1.36)と解釈の可能性から、今回は2因子を抽出した。保守的な性役割観の項目が多い因子を“保守的な性役割観”(項目例:女性 は家庭の管理にあたるべきであり、企業組織での管理運営は男性に任せておくべきだ)と名付けた。もう一つの因子は男女平等的な意識に基づいた内容が多いため、“平等主義的意識”(項目例:仕事を持つということは、自分自身の人生を生きているということだ)と名付けた。なお、平等主義的意識($\alpha = .56$)については、やや信頼性が低いが、今回はそのまま因子として分析を進めることとした。保守的な性役割観($\alpha = .74$)に関しては十分な信頼性があると結論した。

3) 各因子の記述統計

デートバイオレンス・ハラスメント尺度とISRO尺度の各因子の記述統計をTable 3に示した。

2. 教育経験とデートDVに対する抵抗、性役割観の関連性

1) 教育経験の度数分布

教育内容の度数分布をTable 4-1、教育の場の度数分布をTable 4-2、教育方法の度数分布をTable 4-3に示した。教育内容では、異性との関わり方に関する教育を受けたことがあると回答したのは35人で、受けたことがないと回答したのは68人であった。教育の場は、保健体育を通して教育を受けたと回答した割合が多かった。また、小学校から高校の間に教育を受けたことがあると全員が回答していた。また、ほとんどの人が学外では教育を受けたことがないと回答した。受けたことがある教育内容の合計値を教育種類とした。

Table1 デートバイオレンス・ハラスメント尺度の信頼性

因子名	項目内容	α
I 直接的暴力	相手に顔面を拳でなぐられる 相手に身体を平手で打たれる 相手に髪の毛を引っ張られる 相手に身体を拳で殴られる 相手に身体を足で蹴られる 相手に顔面を平手で打たれる	$\alpha = .96$
II 間接的暴力	殴るそぶりや、ものを投げつけるふりをしておどかされる 大声で怒鳴りつけられたり、叫ばれたり、罵られる 相手にもものを投げつけられる 机や壁を殴る、蹴るなどして相手から脅かされる 意に沿わないからと言ってにらまれる 相手に自分を所有物のように扱われる	$\alpha = .93$
III 支配・監視	交友関係や行動をチェックされる 用事があって会えなかった場合などに、俺を優先しないといって怒られる 相手へのメールの返信や電話が少し遅れると腹を立てられる 勝手に携帯のメールや着信履歴を見られる 一日に何回もメールや電話をされる 携帯の電話帳やメールを消せと命令される 頻繁に電話やメールをされて、自分が誰に会っているのかや自分の行動を確認される 相手に男性の友人との付き合い（会うことや話すこと）を制限される 「俺とあいつ（人、もの、ことがらなど）のどっちが大事なんだ」という言い方を相手にされる 少し連絡が取れないだけで浮気を疑われる 相手から大量のメールを頻繁に送られる 自分が異性と一緒に行ったり話したりすることに嫉妬される 行き先を告げさせられたり報告させられる 相手へのLINEの返事が遅かったり、既読なのに返事を送らなかったとして腹を立てられる	$\alpha = .94$
IV 言語的暴力	相手に馬鹿にされたり、見下されるような言い方をされる 人前で恥をかかされたり、馬鹿にされる 「ブサイク」などとわざと自分が嫌がる呼び方で呼ばれる 「痩せろ」など、体型のことに口を出される 自分と他の女性や以前の交際相手を比較される 相手の趣味に合わない髪形や服装だと、馬鹿にされたり文句を言われたりする	$\alpha = .88$
V 経済的暴力	貸したお金やものを返されない デートの時など相手にお金を払わされる お金やものを貢がされる	$\alpha = .80$
VI 付きまとい・ストーキング	生活上困るような時間（深夜や授業中など）にたいした用事もないのに電話をかけてこられる 相手に実家やアパートに押しかけられる 生活上困るような時間（深夜や授業中など）に、たいした用事もないのに「会いに来て」と言われる 別れようとするすると自傷行為をして脅される 別れようとするすると困ることを言って脅される 嫌がっているのに、どこに行くのも相手についてこられる 別れるなら死んでやると言われる	$\alpha = .87$

Table2 ISRO尺度の因子分析結果

	I	II
〈保守的性役割観〉 $\alpha = .74$		
女性は家において、子どもの世話をしている方がずっと幸福である	.82	.13
重要な仕事を数々抱えていても、やはり女性の本来いるべき場所は家庭なのである	.79	.09
女性は自分のキャリアを考えるよりも、まず育児と家事を自分の仕事だと心得るべきである	.76	.08
特別なケースを除き、妻が料理や掃除をやり、夫が家族のために金を稼いでくべきだ	.70	.01
女性は家庭の管理にあたるべきであり、企業組織での管理運営は男性に任せておくべきだ	.52	-.10
子どもを産むことが女性の証である	.51	-.00
妻に働かせて自分は家で子どもの世話をするような男性を尊敬することはできない	.37	-.20
女性がキャリアを求めるならば、大方の女性は子どもを持つべきではない	.34	-.03
母親が働いていると、就学前の児童には害がおよぶことがある	.34	-.12
肉体的な重労働が女性に向かないように、精神的・感情的特質ゆえに女性に向かない仕事もいろいろあるということを女性自身が自覚するべきだ	.29	.12
キャリアを求める女性にとって、出産や育児がその障害になることがあってはならない	-.28	.17
〈平等主義的意識〉 $\alpha = .56$		
男でも女でも、同じ仕事に対しては同じ賃金（報酬）が支払われるべきだ	-.02	.71
働く母親でも、働いていない母親とまったく同じように、子どもとの間に暖かな安定した関係を確立することはできる	.05	.52
夫が家庭内の雑用を受け持ち、妻が家計を賄ってもいいと思う	-.27	.48
女性にも、男性とまったく等しい雇用の機会が与えられるべきである	.09	.46
仕事を持つということは、自分自身の人生を生きているということだ	.12	.14
	因子間相関行列	I II
	—	— -.44

Table3 各尺度の記述統計量

	平均値	標準偏差	N
直接的暴力	4.61	.82	103
間接的暴力	4.33	.86	103
支配・監視	3.68	.89	103
言語的暴力	4.17	.81	103
経済的暴力	4.13	.90	103
付きまとい・ストーキング	4.10	.83	103
保守的性役割観	2.39	.51	103
平等主義的意識	4.18	.46	103

この平均値及び標準偏差は、 $Mean = 5.86$, $SD = 1.68$ であった。

教育経験の満足度の度数分布をTable 4-4に示した。「役に立たなかった」と回答した人数は0人であった。このことから、教育経験に対して役に立っていないと感じている人は少ないということがわかった。

2) 教育経験の相関分析

教育内容の数の合計を「教育種類」、教育を受けた場の合計を「場の数」、教育を受けた方法の合計を「方法の数」とし、これらを教育経験とした。これら教育経験とデートDVに対する抵抗度、性役割観の各尺度との相関の結果をTable 5に示した。教育種類と直接的暴力の間に弱い正の相関 ($r = .26$, $p < .01$) が見られた。教育種類と間接的暴力の間に弱い正の相関 ($r = .21$, $p < .05$) が見られた。場の数(受けた時期)と支配・監視に弱い正の相関 ($r = .20$, $p < .05$) が見られた。このことから、教育種類を多く経験することで、直接的暴力と間接的暴力に対して被害を認識し、抵抗する傾向があることが示された。満足度と間接的暴力との間に弱い正の相関 ($r = -.20$, $p < .05$) がみられた。このことから、満足度が高いほど間接的暴力の被害を

女子大学生のデートDVに対する態度（今村友木子 松尾 有紗）

Table4-1 教育内容の度数分布

	受けたことがある	%	受けたことがない	%
防犯（身を守る方法）	87	(84.46)	16	(15.53)
ネットリテラシー	94	(91.26)	9	(8.73)
異性との関わり方	35	(33.98)	68	(66.01)
LGBTQ	69	(66.99)	34	(33.00)
ジェンダー	75	(72.81)	28	(27.18)
性行為（避妊具や避妊薬など）	87	(84.46)	16	(15.53)
性病（梅毒など）	68	(66.01)	35	(33.98)
生命の誕生	89	(86.40)	14	(13.59)
その他	0	(0)	103	(100)
小学校から高校	103	(100)	0	(0)
大学	50	(48.54)	53	(51.45)
学外	5	(4.85)	98	(95.14)
保健体育	102	(99.02)	1	(0.97)
家庭科	7	(6.79)	96	(93.20)
社会	15	(14.56)	88	(85.43)
共通教育	36	(34.95)	67	(65.04)
専門科目	24	(23.30)	79	(76.69)
講演会	43	(41.74)	60	(58.25)
研修	1	(0.97)	102	(99.02)
本	9	(8.73)	94	(91.26)
その他	7	(6.79)	96	(93.20)

Table4-2 教育の場

	受けたことがある	%	受けたことがない	%
小学校から高校	103	(100)	0	(0)
大学	50	(48.54)	53	(51.45)
学外	5	(4.85)	98	(95.14)

Table4-3 教育の方法

	受けたことがある	%	受けたことがない	%
保健体育	102	(99.02)	1	(0.97)
家庭科	7	(6.79)	96	(93.20)
社会	15	(14.56)	88	(85.43)
共通教育	36	(34.95)	67	(65.04)
専門科目	24	(23.30)	79	(76.69)
講演会	43	(41.74)	60	(58.25)
研修	1	(0.97)	102	(99.02)
本	9	(8.73)	94	(91.26)
その他	7	(6.79)	96	(93.20)

Table4-4 教育経験に対する満足度

満足度	役に立たなかった	あまり役に立たなかった	どちらともいえない	大体役に立った	役に立った
人数	0	7	15	39	42
%	(0.00)	(6.79)	(14.56)	(37.86)	(40.77)

Table5 教育経験と各尺度の相関分析結果

	デートDVへの抵抗						性役割観	
	直接的暴力	間接的暴力	支配・監視	言語的暴力	経済的暴力	付きまとい・ストーキング	保守的性役割観	平等主義的意識
教育種類	.26**	.21*	.11	.18	.17	.12	.02	.02
場の数	.05	.04	.20*	.08	.12	.14	-.17	.03
方法の数	.07	.07	.05	.06	-.01	.04	-.14	.05
教育経験の満足度	.18	.20*	.00	.13	.09	.09	.03	.05

** $p < .01$ * $p < .05$

認識し、抵抗する傾向があると示された。

3) 教育内容ごとの経験によるデートDVへの抵抗と性役割観の比較

教育種類は、「防犯（身を守る方法）」、「ネットリテラシー」、「異性との関わり方」、「LGBTQ」、「ジェンダー」、「性行為（避妊具や避妊薬など）」、「性病（梅毒など）」、「生命の誕生」、「その他」の教育内容から成る。これらの教育を受けた経験の有無によるデートDVへの抵抗度と性役割観を比較した。ネッ

トリテラシーは経験の有無によって直接的暴力への抵抗の差に有意傾向が見られた。異性との関わり方は経験の有無によって間接的暴力、支配・監視への抵抗の差に有意傾向が見られた。それ以外の教育内容では有意差は見られなかった。このことから、ほとんどの教育は、受けたことがあったとしても、受けていない場合と比較して、デートDVの被害に対して抵抗することや性役割観に対して大きな差異が見られるわけでは無いことがわかっ

Table6-1 ネットリテラシーに関する教育経験によるデートDV抵抗と性役割観

	教育経験あり	教育経験なし	t 値
直接的暴力	4.71 (.63)	3.61 (1.62)	2.03 †
間接的暴力	4.42 (.71)	3.48 (1.62)	1.71
支配・監視	3.72 (.84)	3.26 (1.29)	1.48
言語的暴力	4.23 (.70)	3.51 (1.46)	1.44
経済的暴力	4.19 (.81)	3.51 (1.52)	1.30
付きまとい・ストーキング	4.16 (.74)	3.50 (1.39)	1.39
保守的性役割観	2.38 (.50)	2.52 (.64)	-.77
平等主義的意識	4.19 (.45)	4.11 (.62)	.50

※ () 内は標準偏差

** $p < .01$, * $p < .05$

Table6-2 異性との関わり方に関する教育経験によるデートDV抵抗と性役割観

	教育経験あり	教育経験なし	t 値
直接的暴力	4.75 (.67)	4.54 (.88)	1.32
間接的暴力	4.52 (.69)	4.24 (.92)	1.72 †
支配・監視	3.88 (.90)	3.57 (.87)	1.67 †
言語的暴力	4.30 (.74)	4.10 (.83)	1.19
経済的暴力	4.27 (.83)	4.05 (.94)	1.15
付きまとい・ストーキング	4.18 (.80)	4.06 (.84)	.69
保守的性役割観	2.48 (.50)	2.35 (.51)	1.21
平等主義的意識	4.13 (.48)	4.21 (.46)	-.85

※ () 内は標準偏差

** $p < .01$ * $p < .05$

た。差のみられた教育内容による比較結果を Table 6-1, Table 6-2 に示した。

3. デートDVを行う人物の想定に関する分析

1) 現実の人物と架空の人物を想定した場合の相関分析

デートDVの質問に回答する際に、現在の交際相手、または過去の交際相手を想定した場合は「現実」、架空の交際相手を想定した場合は「架空」と分類し、各尺度の相関分析を行った。その結果、現実の人物を想定した場合でのみ、保守的性役割観と言語的暴力への抵抗の間に負の相関 ($r = -.29$) が見られた。架空の人物を想定した場合はどの因子とも相関が見られなかった。Table 7-1 に現実の人

物を想定した場合の相関分析の結果を示した。Table 7-2 に架空の人物を想定した場合の相関分析の結果を示した。

2) 現実の人物と架空の人物を想像した場合の比較

回答にあたって思い浮かべた人物像の違いによる抵抗の程度を比較するため、現実の人物と架空の人物を想定した群の間で t 検定を行ったところ、支配・監視 ($t(101) = -2.88, p < .01$), 経済的暴力 ($t(101) = -2.23, p < .05$), 付きまとい・ストーキング ($t(101) = -2.66, p < .01$) は架空想定群の方が有意に高く、保守的性役割観 ($t(101) = 2.19, p < .05$) については現実想定群の方が有意に高かった。このことから、現実の人物を想像した場合は架

Table7-1 現実の人物を想像した場合の相関分析結果

	デートDVへの抵抗						性役割観
	直接的暴力	間接的暴力	支配・監視	言語的暴力	経済的暴力	付きまとい・ストーキング	保守的性役割観
間接的暴力	.95**						
支配・監視	.63**	.74**					
言語的暴力	.88**	.92**	.68**				
経済的暴力	.77**	.83**	.71**	.73**			
付きまとい・ストーキング	.81**	.86**	.83**	.80**	.77**		
保守的性役割観	-.16	-.17	-.04	-.29*	-.03	-.08	
平等主義的意識	.15	.14	.02	.19	.06	.04	-.37**

** $p < .01$ * $p < .05$

Table7-2 架空の人物を想像した場合の相関分析結果

	デートDVへの抵抗						性役割観
	直接的暴力	間接的暴力	支配・監視	言語的暴力	経済的暴力	付きまとい・ストーキング	保守的性役割観
間接的暴力	.86**						
支配・監視	.44**	.64**					
言語的暴力	.56**	.71**	.63**				
経済的暴力	.67**	.69**	.51**	.58**			
付きまとい・ストーキング	.65**	.78**	.75**	.67**	.65**		
保守的性役割観	.01	-.03	-.09	-.13	.01	-.02	
平等主義的意識	.08	.15	.07	.10	.13	.11	-.17

** $p < .01$ * $p < .05$

Table8 現実想定群と架空想定群のデートDV抵抗と性役割観の比較

	現実想定群	架空想定群	t 値
直接的暴力	4.58 (.96)	4.65 (.64)	-.43
間接的暴力	4.32 (.95)	4.35 (.75)	-.17
支配・監視	3.44 (.97)	3.93 (.71)	-2.88 **
言語的暴力	4.12 (.92)	4.22 (.66)	-.67
経済的暴力	3.95 (1.07)	4.33 (.62)	-2.23 *
付きまとい・ストーキング	3.91 (.96)	4.32 (.60)	-2.66 *
保守的性役割観	2.50 (.49)	2.28 (.51)	2.19 *
平等主義的意識	4.14 (.48)	4.23 (.44)	-1.04

※ () 内は標準偏差

* $p < .05$ ** $p < .01$

空の人物を想像した場合と比較して、デートDVに抵抗する程度が低いことが明らかとなった。また、現実想定群は、架空想定群と比較して保守的性役割観の傾向が有意に高かった。Table 8 に分析結果を示した。

【考察】

1. ISRO尺度に関して

日本語版ISRO尺度(東, 1990)は *male-female division of responsibility, conflicts between having children and having a career, appears to tap the domain of work* の3因子で構成されていたが、今回は2因子が抽出された。各因子の項目内容からそれぞれ保守的性役割観、平等主義的意識と名付けた。鳥毛・鄭(2020)の研究においては、男性より女性の方が男女平等に対して課題意識を持っていることが示されている。今回、調査対象が女子大学生のみであったため、ISROが2因子に分けられたことは、女性の男女平等的な考え方が結果に反映された可能性がある。これは女性の社会的な立場の変化や、共働き世帯の増加により男女が共に仕事と家事を行うことを自然なこととする考え方が広がってきていることなどによる影響が考えられる。

また、ISROはキャリアや育児など、女子大学生にとっては将来に関することを多く尋ねているため、想像で補って回答しなければ

ならないが、労働と家庭生活の中で優先順位を決定する際の葛藤などを想像しにくいと考えられる。そのため極端な回答になって2因子構造に影響を与えた可能性もあるだろう。

2) 仮説の検討

教育種類は直接的暴力、間接的暴力への抵抗との間に弱い正の相関が見られ、場の数は支配・監視への抵抗との間に弱い正の相関が見られた。また、教育種類の中に含まれる「ネットリテラシー」の教育経験の有無は直接的暴力に対する抵抗の差に有意傾向が見られ、「異性の関わり方」の教育経験の有無は間接的暴力、支配・監視に対する抵抗の差に有意傾向が見られた。方法の数に相関は見られなかった。保守的性役割観、平等主義的意識は教育経験と相関が見られなかったため、教育経験と性役割観の関連性が見出されなかった。以上のことから、仮説①の一部が支持された。デートDVの防止に関する教育を受けた人ほど一部の暴力に対しては認識が高まり、抵抗する傾向が高くなるといえる。

回答の際に現実の人物を想定した場合は、保守的性役割観と言語的暴力への抵抗の間に負の相関が見られた。架空の人物を想定した場合はいずれの尺度とも相関が見られなかったことから、仮説②は支持された。実際に交際をしていると、暴力を認識したとしても抵抗する程度が低くなるといえる。そこには相

手との関係に対する葛藤が関係していると考えられる。

3) 教育経験に関して

①教育の種類

教育の種類は、直接的暴力、間接的暴力への抵抗との間に弱い正の相関が見られた。直接的暴力と間接的暴力は行動として認識できる暴力であるため、暴力を受けたラインを比較的是っきりと判断することができ、教育する際にも教えやすく理解されやすい。しかし、言語的暴力などの目に見えない暴力の場合、直接体に傷をつけられるわけではなく、また言語表現には幅があるため、自分が被害を受けたのかどうかという判断があいまいである。そのため、言語的暴力について教育を受けて知っていたとしても、自分が暴力を受けていると認識しにくいのではないかと考えられる。笹竹（2014）は、実際に心理的デートDVを経験している者は、行動の裏にある相手の愛情も感じていると述べている。このように、自分の傷つきと相手に対する愛情の間で葛藤が起こり、暴力の認識をより曖昧にしていると考えられる。暴力に気付かない、または傷ついている自覚があるのにも関わらず無視していると、自分の傷つきに鈍感になり、目に見えない暴力に慣れ、さらに深刻な被害に巻き込まれてしまう可能性がある。

これらのことから、支配・監視、言語的暴力、経済的暴力、付きまとい・ストーキングといった目に見えない暴力は、感じ方の個人差が大きいからこそ、知識があったとしても葛藤が起こり、暴力の認識がしにくくなると考えられる。そのため、教育経験との関連性が現れにくかったのではないかと考えられる。

②場の数に関して

場の数と支配・監視への抵抗に正の相関がみられたことは、教育した内容とかわる出来事を見聞きした際、受けた教育が直接的あ

るいは間接的に思い出されるからではないかと考えられる。2回3回と関連する内容を繰り返して学ぶことで、学びを想起しやすくなり、見えない暴力に対して認識が高まると考えられる。

③教育種類に関して

ネットリテラシーの教育経験の有無による直接的暴力への抵抗の差に有意傾向が見られた。しかし、今回の調査対象となっている女子大学生は必修科目として「ネットリテラシー」に関する講義を全員受講している。「教育経験無し群」は、それにも関わらずネットリテラシーを受けていないと回答しており、自身の受けてきた教育内容にあまり関心を持っていないと考えられる。この群については、自身の受けた教育だけでなく、周囲の状況や情報に対しても無関心であるという可能性が考えられる。これらのことが直接的暴力への抵抗の弱さにつながっているのではないかと。

また、「異性とのかかわり方」の教育を受けたことがある群の方が受けたことがない群よりも間接的暴力と支配・監視の暴力に対して抵抗する傾向が示された。直接的暴力への抵抗には有意差はないが、2群がともに高い度合いで抵抗する値を示している。松並ら（2017）は依存的恋愛観が高い人は、相手と自分が一体化するような状態を愛であると感じるため、恋人を束縛したり束縛されたりすることを当然だと思ふ傾向があると指摘している。さらに松並（2020）は高校生の調査において、男女ともに依存的恋愛観が強まると、恋人への暴力行為を「暴力」と認知しない傾向を明らかにした。「異性とのかかわり方」についての教育は恋愛観の形成に影響すると考えられることから、依存的な関係ではなく、適切な距離感を保ったよりよい異性との関わり方を学ぶことが見えない暴力に対し

て効果的なのではないかと考えられる。しかし一方で、提示された教育内容の中で「異性との関わり方」のみ「受けたことがある」と回答した人よりも「受けたことがない」と回答した人が多かった。このことから、「異性との関わり方」は異性とのより良い関係を築くために重要な教育である可能性が高いにも関わらず、これまでの教育の機会は十分ではなかったということがわかる。2021年度から推進されることとなった文部科学省の「生命(いのち)の安全教育」において「異性との関わり方」に関連する内容は「よりよい人間関係」、「相手との距離感」などが挙げられる。教育の内容としては、場面の想定をさせ、どう行動したらよいかを児童生徒に考えさせるものが多い。しかし、ISROの尺度に関連して先述した通り、想像では物事が単純化されやすく、その場面で起こる葛藤を想像することは非常に難しい。さらに、興味関心を持って教育に取り組めるかどうかも重要となっている。以上のことから、「デートDVとはこういうものだ」といった表面的な説明の教育だけではなく、自分と相手を大切にしている関係とはどういうものか、お互いを大切にしながらどのように関係の危機を乗り越えるのかということを見習い、児童生徒、学生だけでなく教員もともに考えていくような教育を期待したい。

「方法」の自由記述では、「ネット・漫画」や「YouTube」の回答がみられた。情報を得る際にインターネットやSNSが用いられているという点は見逃せない。インターネットから得る情報の量は膨大であり影響力も大きい。インターネットで性に関する正しい情報を発信する動画も存在しているが、間違った情報も混在しているのが現状である。インターネットに触れる年齢はどんどん下がっており、どの世代にとってもインターネットは

身近な存在となっている。藤原・吉岡(2014)は、女子大学生は「携帯電話を無断で見る」といった携帯電話に関する暴力についての認識が低かったことを指摘している。このことから、小中学校の時からネットリテラシーの教育をより充実させることも今後デートDVを防止していくうえで必要だと考えられる。異性とのかかわり方など他の内容とも結びつけながら、自分も当事者になりえるという意識をもって取り組めるような教育を行うことが重要である。

④教育経験の満足度に関して

教育経験に対する満足度が高いと間接的暴力への抵抗が高まる傾向が見られた。また、満足度に関しては、「役に立たなかった」と回答した人はおらず、「大体役に立った」「役に立った」と回答した人がほとんどであり、教育を受けたことを無意味だと感じている学生は少ないということがわかった。教育経験に対する満足度が間接的暴力以外と関係が見られなかったのは、その場での教育経験に対する満足度ではなく、後の人生においてデートDVに関連することを見聞きした時に教育経験を思い出してデートDVの認識につながるからではないかと考えた。このことから、「知っている」と「知らない」ではデートDVの認識に大きな差があるということが考えられる。よってデートDVに関連する教育を受けた経験を重ねることでデートDVの暴力、特に見えない暴力に対する認識の促進に役立つのではないかと考えられる。デートDV防止教育については、近年プログラム開発が増えてきている(下村ら, 2021, 笹竹, 2020)、児童・生徒や学生が主体的に学び、適切な関係を育むための教育が求められる。

4) 現実の人物と架空の人物を想像した場合の違いに関して

現実の人物を想像した場合に言語的暴力へ

の抵抗と保守的性役割観の間に負の相関が見られたことから、伝統的な性役割観であるほど言語的暴力を認識しにくく、抵抗しにくいということが示唆された。松永・森脇（2019）は、「女性の方が男性より対等ではなく男性を恐怖と感ずることがある」と述べており、暴力的な振る舞いに対して異を唱えることを恐れたりする可能性が考えられる。さらに、内閣府（2021）の調査では男性は女性よりも性別役割意識が強い傾向が示されている。これらのことから、男性が女性に「おしとやかでおとなしい」などの属性を期待する傾向があるのに対して、伝統的な性役割観をもつ女性ほど、その期待に自分を合わせようとし、暴力への認識を持つことや抵抗することが難しくなるのではないかと考えられる。保守的性役割観の値は全体としては3.0を下回る低い値であったが、現実群と架空群の比較においては、現実群のほうが有意に高い値が示された。このことから、現実の相手を意識すると、相手の期待に応じて、伝統的な性役割に自分を当てはめようとするのが考えられる。

架空の人物を想像した場合には、デートバイオレンス・ハラスメント尺度のどの尺度とも教育経験及び性役割観の間に相関が見られなかった。また、現実の人物と架空の人物を想像した場合の検定では、支配・監視、経済的暴力、つきまとい・ストーキングは架空群の方が有意に高いことが示された。これらのことから、架空の人物を想定した場合、暴力を受ける立場に自分を置き換えたとしても葛藤がなく、自分が嫌だと感じる暴力には強く抵抗すると回答したと考えられる。つまり、想像では抵抗できても、現実で同じことが起こった時に抵抗できるとは限らないと言える。有意差の見られなかった直接的暴力と間接的暴力、言語的暴力に対しては、2群と

も平均値が4.0を超え、強く抵抗する態度が示された。従って、暴力かどうか曖昧な支配・監視、経済的暴力、つきまとい・ストーキングといった行為に対して抵抗するか否かは、自分と相手の関係性やその時に起こる葛藤が大きく関わっていることが示された。

【まとめと今後の課題】

本研究より、女子大学生は直接的暴力や間接的暴力といった見える暴力に対しては抵抗するが、見えない暴力に対しては抵抗しにくいことがわかった。しかし、多くの場面で教育を受けるほど、支配・監視に抵抗する傾向が見られたため、繰り返し学ぶことが重要である。また、異性との関わり方に関する教育はデートDVへの抵抗に対して意味があるにもかかわらず、今までそういった教育自体が十分ではなかったことが示された。異性や他者とのよりよい関わりについて、教育の中で大切なものとして位置づけ、児童、生徒だけでなく教師自身も関心をもって向き合っていく必要があるだろう。

また、架空の相手よりも現実の交際相手に対しては、保守的な性役割観に基づいた態度を取ろうとしたり、暴力的な行為に対しても抵抗しにくくなったりする可能性が示された。現実の交際場面において、相手の期待に合わせすぎず、対等なパートナーとして向き合うことが暴力に抵抗することや相手の暴力を抑制することにつながり、よりよい関係を築いていけるものと考えられる。

今回の調査では女子学生が対象であったが、今後、男子学生や教師のデートDVに関する意識についても調査していくことが必要である。また、今後「生命（いのち）の安全教育」を受けた世代にも調査を行うことで、その取り組みによる影響を検討することができると考えられる。

【引用文献】

- 東清和 (1990). 青年期における性役割志向性の性差 社会心理学研究 6(1), 23-32.
- 藤田結子 (2017). ワンオペ育児 わかってほしい休めない日常 毎日新聞出版
- 藤田結子 (2018). 資料1「ワンオペ育児」の現状—首都圏の働く母親の調査から— 平成30年3月22日少子化克服戦略会議
 〈https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/meeting/kokufuku/k_4/pdf/s1.pdf〉 (2021年12月29日閲覧)
- 藤原美智子・吉岡伸一 (2014). 青年期における親密な関係の若者間の暴力被害に関連する要因について 米子医学雑誌 65(2), 37-48
- 「現代用語の基礎知識」選 ユーキャン新語・流行語大賞 (2017). 第34回2017年ノミネート語
 〈<http://www.jiyu.co.jp/singo/index.php?eid=00034>〉 (2021年12月29日閲覧)
- 厚生労働省 (2021). 育MEN (イクメン) プロジェクト
 〈<https://ikumen-project.mhlw.go.jp/>〉 (2021年12月13日閲覧)
- 松永明莉・森脇智秋 (2019). 大学生のデートDVの認識と友人から相談を受けたときの対応 徳島文理大学研究紀要97, 31-38
- 松並知子・赤澤淳子・井ノ崎敦子・上野淳子・青野篤子 (2017). 成人におけるデートDVの実態とダメージの認知：依存的恋愛観と暴力容認傾向との関連 神戸女学院大学論集 64, 31-46
- 松並知子 (2020). 高校生における依存的恋愛観の心理的要因およびデートDV暴力観との関連～ジェンダー差に注目して～日本健康相談活動学会誌 15(1), 52-57
- 文部科学省 (2021). 性犯罪・性暴力対策の強化について
 〈https://www.mext.go.jp/a_menu/danjo/anzen/index.html〉 (2021年12月15日閲覧)
- 内閣府男女共同参画局 (2021). 男女間における暴力に関する調査 (令和2年度調査)
 〈https://www.gender.go.jp/policy/no_violence/e-vaw/chousa/pdf/r02/r02danjokan-12.pdf〉 (2021年12月24日閲覧)
- 内閣府男女共同参画局 (2021). 令和3年度性別による無意識の思い込み (アンコンシャス・バイアス) に関する調査研究調査結果
 〈https://www.gender.go.jp/research/kenkyu/pdf/seibetsu_r03/02.pdf〉 (2021年12月13日閲覧)
- 越智啓太・長沼里美・甲斐恵利奈 (2014). 大学生の対するデートバイオレンス・ハラスメント尺度の作成 法政大学文学部紀要 69, 63-74.
- 笹竹秀穂 (2014). 大学生の心理的デートDVの被害経験の実態および被害の認識の性差 学生相談研究 35, 56-69
- 下村淳子・赤澤淳子・井ノ崎敦子・上野淳子・松並知子 (2021). 高等学校におけるデートDV防止教育の現状と課題—養護教諭が対応した被害相談との関連— 愛知学院大学論叢, 心身科学部紀要 17, 27-36.
- 鳥毛彩花・鄭曉静 (2020). 中学校教員のジェンダーに関する意識と実態—長野県中学校教員への質問紙調査を通して— 信州大学教育学部研究論集 14, 197-206